

D-5 保育的遊戯療法の実践的研究 (2) 遊びに見られる発達について  
お茶大家政 ○伊賀順子 浅見千鶴子 鈴木宏子 岸千代子

目的 何らかの発達上の遅れを持つ幼児の集団における保育的遊戯療法の実践場面で見られる幼児の発達的な姿及び発達的な変化を捉えよとした。

方法 対象は、1977年4月から1978年3月までの期間に行なう保育的遊戯療法の幼児グループに参加した5名(男児4、女児1)である。セラピストは4~5名よりなり、活動後、参加観察の記録を行なった。子供らは、ひとり遊びないしは、並行遊びを中心とし、各々の好みに従った素材やテーマによる遊びを展開している。その過程でセラピスト及び他児と相互に影響し合うのが見られる。本報告では、上述の参加観察記録により、各子供の遊びに注目し、遊びの内容及びその変化に見られる発達の姿を捉えよとした。

結果 対象幼児は、いずれも、認知的発達面、対象活動等において、7歳前後にある。(CA=2;10~4;0)の遊びの素材:水を代表とする変化す素材をどの子も喜んだ。玩具にはブロック、積木、乗り物(ミニカー~列車を含む)動物人形、まごころと道具(特に、コップなど食器)が多く用いられた。遊具はスベリ台、トランポリンを多く用いている。②遊びの内容特徴;感覚遊びが主であり、感覚遊びの多様な発展形態が見られた。例えば運動感覚的なトランポリン遊びや、機能的感覚遊びとしてブロックをはめ込むあるいははさむことを楽しむ遊びが見られ、やがて、構造的な遊びが出現してくる。感覚的なものには、繰り返しが多いが、経過に従って遊び行動に始まりと終り(区切り)が明確に認められるようになった。③遊び場面における関係性(1.子供、2.TH.3対象(物・人))は、1と2の関係の成立、1と3の関係の成立、1と2と3の関係の成立という三つの段階が見られた。